

ピクトグラムの解釈に関する認知記号論的考察

A Cognitive Semiotic Study for an Interpretation of Pictograms

田 中 敦*

要旨

本論では、案内表示に用いられるピクトグラムを記号と捉え、その解釈を認知という動的なプロセスの中で分析することを試みる。

まず、ピクトグラムが、約定性とともに類像性によって対象を指示する記号原理を有することを明らかにし、そのことが原理的に多義的な解釈を許容することを確認する。ただし、案内表示は情報伝達を機能として有するものであり、本来、解釈の多義性は許容されない。

そこで本論では、認知という観点を導入し、認知領域とコンテキストの関与によって、多義性が限定されるプロセスを分析する。具体的には、「空間ドメイン」と「行為ドメイン」という認知領域の区別により、同一のピクトグラムから異なる解釈が導かれることを確認したうえで、案内表示が設置される環境がコンテキストとなり、認知領域の設定を促すことを指摘する。

キーワード：ピクトグラム、認知、記号論、コンテキスト、ドメイン

1. 序論

本論は、田中（2018）に基づき、ピクトグラムが表す情報の解釈を認知記号論的観点から考察することを目的とする。

ピクトグラムは図記号の一種であり、言語に依らず情報を視覚的に伝達し得る手段として、屋外広告物等において広く使用されている。日本国内では、1964年の東京五輪開催時に施設の位置を案内するための図案が策定されたのを機に普及し、近年では、図案の種類および使用場面の増加に応じて、国際規格に合わせた標準化を図る取組が進められている。

田中（2018）では、このピクトグラムを視覚的な記号と捉え、その記号原理について考察したうえで、ピクトグラムの情報伝達機能を分析する際に有用と思われる観定の提示を試みた。具体的には、ピクトグラムが対象施設等の機能を表す上で、類像性、指標性、約定性という記号原理が組み合わせて用いられており、コードを解さない受信者であっても、情報内容が直感的に理解されるように工夫が為されていることを指摘した。併せて、厳密なコードを持たない記号体系において、記号が使用される場面性が多義的な解釈を許容し得ることについても考察した。

これらを踏まえたうえで、本論では、改めてピクトグラムの情報伝達機能を詳らかにし、その情報内容がいかに認知され得るかという点に関して、認知記号論的観点から分析することを試みる。

* TANAKA, Atsushi [非常勤講師]

ピクトグラムは本来、言語の代替手段として、情報を視覚的に表すことが可能な記号である。つまり、ピクトグラムのデザインは記号表現であり、それが表す情報を記号内容として有するものと言うことができる。ピクトグラムにおける記号表現と記号内容との結合は、約定性を原則とするものであるが、この約定性を軽減し、コードを解さない受信者にも情報が伝達されるよう、視覚記号の特性を活かした類像性も同時に活用されている。

ただし、約定性の軽減は多義的な解釈を許容することにもつながり、情報伝達機能から考えた場合には、問題となり得るものである。本論では、認知主体と記号のインタラクションという観点から、ピクトグラムの情報内容の解釈を動的なプロセスとして捉えることにより、記号の多義性がドメインおよびコンテキストの作用によって一義的に決定されることを確認する。

本論の構成は、以下のとおりである。

まず、次節でピクトグラムの情報伝達機能を再確認し、3節ではその解釈を決定する要因について考察する。

続いて4節で、記号が使用される場面性と意味の決定との関係性を確認したうえで、5節では視知覚分析の観点を通時的に概観し、認知という観点を導入する。さらに6節では、認知領域と多義性の関係性を考察し、特定の認知領域の設定が多義性を限定する原理について、具体例を通じて確認する。

以上の構成により、本論では、認知主体がピクトグラムという視覚記号を認知する際に、いかなるプロセスを経て情報内容を解釈し得るのかについて分析を試みる。

2. ピクトグラムの機能

本論で考察の対象とするのは、屋外に設置されている案内表示板等に用いられている「絵記号＝ピクトグラム」であり、中でも、その形式が一般化しているものを主な分析対象とする。

具体的な考察に先立ち、本節では、分析対象であるピクトグラムが果たす役割について概観することとし、「公共サイン」の情報伝達機能を論じた本田・岩田・倉林（2017）に基づき、本論における論点の確認を試みる。

本田・岩田・倉林（2017）は、何らかの情報伝達機能を担う標示・掲示類を「サイン」と総称したうえで、サインを「公共サイン」と「商業サイン」とに大別する。うち、公共サインとは「（公的な）組織・機関・法人等が、人々の行動、生活の利便性を高める目的で設置したもの（同書6）」とされ、企業や法人が利益目的で設置する商業サインとの区別が為されているが、同時に、両者の厳密な線引きを行うことは難しいとも述べられている。

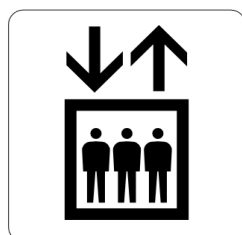
さらに、各種のサインに表示されるピクトグラムについては、「言語の代わりに、そして、言語と同質の情報を伝達する機能を持つ象徴化、定型化された絵や図。シルエットとして表現されていることが多い。（同書8）」との定義が掲げられている。ここで、「象徴化」および「定型化」という言葉が用いられている点に注目してみたい。

まず象徴化に関しては、公共サインのピクトグラムが施設や設備を表すものであるならば、象徴化などせず、対象を忠実に再現すればよいという考え方もあり得る。その際には絵や図を用いる必要はなく、写真を使用すれば正確かつ厳密な視覚像を再現することができる。

たとえば図1から3は、いずれも日本工業規格に登録されているピクトグラムであるが、各々が表す施設あるいは設備を図案化するうえで、対象個々の特性は捨象されている。しかし、もし施設・設備の存在を案内することが目的であれば、これらのピクトグラムの代わりに実物の写真

を案内板に表示し、それらが存在する位置を示す矢印記号を付すことで、その目的を果たすことが可能であるし、抽象化による誤解を避け、より正確に対象の存在を示すことができるとも考えられる。

図 1.



[エレベーター]

図 2.



[くず入れ]

図 3.



[コインロッカー]

(画像出所：「公益財団法人 交通エコロジー・モビリティ財団」ホームページ)

この点について田中（2018）では、案内表示に用いられるピクトグラムは、主に指示対象施設等の機能性を表示することを目的とするものであると指摘した。個別の施設・設備の外観や形状は千差万別であっても、それらが果たす機能はほぼ共通している。ピクトグラムは、この共通の機能性を表示することを目的とするものである。

その観点から見れば、図 1 に付された上下の矢印がエレベーターの昇降機能を示すこと、図 2 は人物が捨てるゴミを収容する設備の機能を示していること、さらに、図 3 では、荷物を保管する機能が図案によって示されていることを容易に理解することができる。

このように、案内表示におけるピクトグラムが主たる目的とするのは、指示対象となる施設等の機能性を伝達することであり、そのうえでは、対象の外観に関する詳細な情報は不要である。重要なのは、可視化が困難な機能性をいかに視覚的に表現するかという点にあり、象徴化された図案の細部に様々な意匠が凝らされているのである。

なお、機能性を表すために用いられるピクトグラムの図案が、一律である必要はない。たとえば以下の図 4 から 6 は、いずれも禁煙を表すピクトグラムの例である。

図 4.

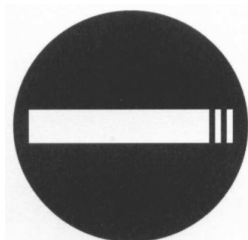


図 5.



図 6.



(画像出所：図 4, 5 Crow 2010: 24,

図 6 「公益財団法人 交通エコロジー・モビリティ財団」ホームページ)

Crow（2010）がデザイン案として掲げる図 4 および図 5 では、交通標識および×印からのアナロジーにより、喫煙を禁止する伝達内容を理解することができる。また、これに限らず、多様

なデザインの可能性が想定され得るところであるが、実際に禁煙を表すピクトグラムとしては、図6のデザインを目にする機会が圧倒的に多い。これはピクトグラムの定型化であり、現に図6のデザインは、既に日本工業規格にも登録されている。

定型化とはすなわち、ある記号内容を表すうえで特定の記号表現のみが適用される状況であり、これが行き着くのは厳密なコード化であると言える。つまり、ピクトグラムのデザインと情報内容とがいかに恣意的な関係にあると、コードさえ理解していれば情報を読み取ることが可能になる。反対に言えば、コードが理解できなければ、情報を理解できないということとなる。

しかし、この点について、ピクトグラムの定型化には記号としての定着度が関与していることを指摘しておきたい。ピクトグラムにおけるデザインと情報内容とは、はじめから恣意的に定められるわけではなく、本来なんらかの有契性に基づいて設定されている。それらが実際に使用されるなかで、情報伝達効果の高さが認められたものが複製され、広く定着することによって定型化すると考えるのが妥当である。

つまり、ピクトグラムの定型化が進もうとも、記号表現と記号内容の関係は完全に恣意的とはならず、また、他のデザインに交替可能という点では、言語記号のような不易性を有するわけでもない。

そもそも、視覚記号であるピクトグラムは、グッドマン（2017）が言うところの、指示対象を「再現」した記号であり、記号としての離散性を持たない「稠密な」記号体系に相当するものであるため、厳密なコード化を適用することは不可能であるというのが筆者の考えである。

しかし、厳密なコード化が為されないということは、換言すれば、同一の記号表現から多義的な解釈が許容され得るということである。続いては、この多義性を前提に、ピクトグラムの解釈を決定する要因について考察を行う。

3. ピクトグラムの解釈

ピクトグラムとその指示対象との関係性は一律のものではなく、田中（2018）で考察したとおり、複数の記号原理およびその組み合わせを認めることができる。

たとえば、人物の行動や対象施設の特徴を図案化したピクトグラムでは、記号は指示対象との類像性によって成立していると言える。また、運動の方向性を示す矢印記号では、記号の指標性が典型的に実現していると考えられる。さらに、「リサイクル」や「無線電波」のように、抽象概念や不可視の対象を表すうえでは、約定性に基づく記号表現がデザインとして使用されている。

前節でも見たとおり、ピクトグラムにおける記号表現と記号内容の結合は、一定のコードによる約定的を有するが、同時にその結合は、必ずしも恣意的なものではなく、視覚像による再現という有契的な要素を多分に反映したものと認められる。ゆえに私たちは、ピクトグラムによる情報伝達の受信者として、多くの場合、厳密なコードを意識することなく、類像性を根拠として一定の情報を受信している。

しかし、改めて考えてみれば、これは非常に不可思議な状況である。

同じく視覚記号でも、地図記号の場合には、記号表現と記号内容を結ぶコードを理解せずに、記号の指示対象を理解することはほぼ不可能だが、ピクトグラムの場合には、類像性を根拠に指示対象をほぼ特定することができるのである。では、ピクトグラムでそこまで精密なデザインが用いられているかというと、そんなことはなく、これも前節で見たとおり、多くの場合、デザイ

ンは象徴化・単純化されている。

実際に、単純化された記号表現ゆえに誤解を生じさせることもある。本田・岩田・倉林（2017）では、駅構内の自転車走行禁止を示すうえで、自転車に人物が寄り添い、自転車を押しながら歩いている姿を図案化したピクトグラムに関して、図案が何を示すかと問うたところ、「駐輪場」と回答する人が多かったとの例が紹介されている（同書 150）。

しかし、こうした事例はむしろ例外的であり、私たちはピクトグラムの記号表現の多義的な解釈の可能性から、妥当な解釈を選択し、情報内容を適切に読み取っているのである。

たとえば図7のピクトグラムでは、図案化された人体の姿勢から「走行」という行為を読み取れることもできる。しかし、実際にはそれは走行を指示するものではなく、このピクトグラムが掲示された場所が緊急時の屋外への脱出箇所となることを示すものであると、私たちは適切に情報内容を理解する。

また図8の、飲食物のうえに屋根を模した図案を配したデザインからは、飲食物を販売する店舗という解釈とともに、飲食可能な空間を示すものとの解釈も想定され得る。コードを知らない受信者にとっては、いずれの解釈も同等に成立し得るものであるが、にもかかわらず私たちは、このピクトグラムが指示する店舗が、飲食物を販売しているとの解釈を適切に選択する。

図9でも、自転車の図案と禁止を示す図案とを組み合わせたデザインからは、駐輪禁止との解釈も可能であるが、私たちはその解釈を棄却し、このピクトグラムが掲示された場所を自転車で通行することが禁じられているとの解釈を優先する。

図 7.



[非常口]

図 8.



[コンビニエンスストア]

図 9.



[自転車乗り入れ禁止]

（画像出所：「公益財団法人 交通エコロジー・モビリティ財団」ホームページ）

こうした解釈に関しては、当然ながら、ピクトグラムがどのような環境下に掲示されているかという条件が関与している。図7が「非常口」と解されるのは、それが建物内の開口部に表示されているからであり、図8が「コンビニエンスストア」を表すのは、実際に店舗を指示する場面で用いられるからに他ならない。同様に、図9も限定された領域ではなく、通行可能な開放空間に表示されるがゆえに、走行行為を禁ずるものと理解されるのである。

こうしたピクトグラムの使用環境を本論では「コンテキスト」と称し、記号の意味を決定する要因と捉える。ピクトグラムは、コンテキストに応じて多義的に機能し得る記号であり、特定のコンテキストがあるからこそ、その解釈が定まるものである。上述の本田・岩田・倉林（2017）の例で解釈の混乱が見られたのは、コンテキストを捨象して記号表現を提示したことが影響しているのではないかと考えられる。

では、続いて、コンテキストは記号の意味の解釈にどのような影響を与え得るのか、また、そ

ここにはどのような課題が存在するのかについて確認することとしたい。

4. コンテキストと記号の解釈

記号とコンテキストの関係性に関して、Crow (2010) では以下のとおり述べられている。

(1) There are three main areas that form what we understand as semiotics: the signs themselves; the way they are organised into systems and the context in which they appear. (Crow 2010: 15)

(3つの主要な領域が、私たちが記号学として理解しているものを形成する。記号自身、記号が体系にまとめられる方法、そして、記号が現れるコンテキスト、である。)

このように述べた上で、同書では、同じ十字型を表す記号が、交差点や赤十字の医療施設を表し、さらに、傾きを加えた場合には駐車禁止を表す標識として用いられる例が挙げられている。その十字型は、形状としては同一の記号表現でありながら、それが用いられる場面と方法とに応じて、異なる記号内容と結びついており、つまり、同一の記号がコンテキストに応じて多様な対象を指示することになるのである。

コンテキストによる意味の変化は、ピクトグラムのみでなく、広く記号一般に当てはまる性質であり、言語記号においては語用論の研究対象とされている。また、語用論の手法が視覚的記号に適用された分析も存在する。そうした分析の中から、本節では、広告の映像を対象とし、コンテキストを踏まえた「受け手分析」という観点を導入した難波 (2000) と、難波が援用する Pateman (1983) の論に基づき、視覚記号の解釈におけるコンテキストの影響について考察する。

難波 (2000) は、広告の映像に対してデノテーション (直示) / コノテーション (共示) という観点から分析を行い、広告に潜むイデオロギーを解き明かしたロラン・バルトの古典的な映像分析 (Barthes 1964) に対して、その不足点を以下のとおり指摘する。

(2) バルトにもし過誤があったとするならば、「人類の大きな諸テーマ」に一方的に参加させられ、イデオロギー操作を被るのみの受け手像を念頭においたことかもしれない。(難波 2000: 14)

つまり難波によると、広告の受信者たちははじめから「それが広告であり、そこに二重のメッセージがあることを承知している (同書: 15)」のであり、そうした受け手たちが広告を認識しているという状況性を捨象し、単に映像の意味のみを分析しようとするバルトの手法が批判の対象とされるのである。

その難波が分析のあるべき姿を考察する中で援用するのが、Pateman による語用論的分析である。Pateman は、広告が受信される個別の状況こそが、広告の解釈を決定する要因であることを強調する。具体例として挙げられるのは英国郵便局の 1979 年の街頭広告であり、広告内に記された “Jingle bells this Christmas.” というキャッチフレーズは、「クリスマスに電話をかけよう」というメッセージを伝えるものであるが、この広告の解釈は、クリスマスシーズンに、屋外広告掲示板に、郵便局のマスコットキャラクターと共にある広告を人々が認めるという、特定のコンテキストの前提があって成立するものとされる。それとは異なるコンテキストにおいて

認識された場合には、当然、その解釈は変動し得るというのが Pateman の分析の要点である。

この分析を踏まえ、難波はバルトと Pateman との差異について、以下のように言及する。

- (3) バルトに欠けていたのは、個々の広告の置かれた文脈——誰が、いつ、どんな受け手に向かって広告したのか——への関心であり、(中略) 広告の受け手たちは単にその意味作用を被るだけの存在にしか過ぎない。それに対して、ペイトマンの言う「含意」は、広告(主)の意図などを考慮しながら、受け手によって汲み取られていくものなのだ。(難波 2000 : 18)

難波のこの指摘は、本論の分析にも有用なものである。ピクトグラムが表すメッセージもまた、受け手がコンテキストを踏まえて解釈することにより、適切に決定されるものと言うことができる。ピクトグラムという記号の意味を決定するうえでは、コンテキストという要素が不可欠なのである。

ただし、意味の決定の要因をすべてコンテキストに委ねてしまうと、逆に語用論的分析の問題点が顕在化してしまう。語用論的分析とは、本質的に「その場限り」のものである。厳密な意味でのコンテキストとは、再現不可能な一過性のものであるため、厳密なコンテキストを条件とするほど、導かれるのは解釈の多様性ばかりとなり、特定の意味を考察することの意義は失われてしまう。これこそが、意味論的分析と語用論的分析との間の隔たりであるが、続いては、この隔たりを埋めるためにいかなる観点をとり得るかを考察する。

5. 視覚記号の認知

本節では、視覚記号の解釈に関して、認知 (cognition) という観点を導入する。

Wade and Swanston (2001) では、視知覚 (visual perception) を多角的に考察するなかで、心理学における視知覚の捉え方についても通時的に整理している。それによれば、古典的な構造主義心理学においては、視知覚とは外界の光線の反射が網膜に像として映るものとされ、よって、視知覚は外界の事物の姿を反映したもの以上とは捉えられなかった。

やがて、ゲシュタルト心理学 (Gestalt psychology) が登場すると、図と地の反転や記号の配列がもたらす意味など、視知覚の新たな位置づけが考察されることとなる。そこでは、視知覚が単なる外界の事物の反映ではなく、その組み合わせによって生ずる全体としての意味があることが明らかにされる。

さらに、認知心理学 (cognitive psychology) が盛んになると、視知覚は動的なプロセスとして捉えられ、認知主体による対象の捉え方に応じて視覚像の意味は変動し得るものとされる。(Wade and Swanston 2001 : 70-84)

そもそも、知覚 (perception) とは感覚器官への信号入力であり、一定不変と定義されるものであるが、認知 (cognition) とは、状況や背景知識などに適合するよう、その内容を変動させ得るものである。

たとえば次の図 10 も、視覚像としての入力信号として知覚される内容は一定不変のものであるが、その認知内容は、「11, 12, …, 14, …」という数列の中では「13」となり、「A, …, C, D, …」というアルファベットの文字列の中では「B」となるというように、背景環境に応じて変化し得るものである。

図 10.



認知という観点から考えた場合、記号の意味は、認知主体がその記号をいかなる背景に即して捉えるかに応じて弾力的に変動するものである。

認知言語学の分野で認知文法 (Cognitive Grammar) を提唱したラネカー (Langacker) は、言語記号に関して、「魚類の再生産システム」という領域においては「魚卵 (roe)」と認知される対象が、「食用加工」の領域では「キャビア (caviar)」として認知される例を挙げている (Langacker 1991:62)。この記号を認知する際の背景となる認知領域について、本論ではラネカーに慣らって、「ドメイン (domain)」と称することにする。

記号の認知内容がドメインに応じて可変的であるとすれば、多義性の根拠をドメインの差異に求めることができる。記号表現は不変であっても、認知主体が選択するドメインが異なることによって、記号は多義的に解釈され得るのである。反対に言えば、ドメインが定まることによって、記号の解釈は一義的に定まることとなる。

なお、このドメインとは、前節で確認したコンテキストとは異なるものである。コンテキストは記号が現れる環境であるが、ドメインは、認知主体が意味を解釈するうえで設定するものである。よって、個々の認知主体はドメインを能動的に選択することが可能であるが、コンテキストは主体が選択するものではない。

ピクトグラムに当てはめてみると、コンテキストとは、案内表示が掲示されている環境に相当する。いかなる空間に、どのような手段で表示されているかということが、ピクトグラムの解釈に影響を及ぼすものであるが、このコンテキストは、ピクトグラムを認知する主体が自由に改変できるものではない。一方、ピクトグラムを認知するドメインは、認知主体が任意に適用するのであるが、案内表示のピクトグラムに関しては、その記号の性質上、いくつかの典型例を想定することが可能である。

まず、国土交通省のガイドラインでは、公共サインの機能を以下のとおり分類している。

(4) サインの種別

- ・誘導サイン類：施設等の方向を指示するのに必要なサイン
- ・位置サイン類：施設等の位置を告知するのに必要なサイン
- ・案内サイン類：乗降条件や位置関係等を案内するのに必要なサイン
- ・規制サイン類：利用者の行動を規制するのに必要なサイン

(公共交通機関旅客施設のサインシステムガイドブック編集委員会編 2002:7)

つまり、公共サインの役割は主に、対象施設等の位置情報を示し、利用者をその位置まで誘導

すること、また、対象施設等の利用条件や禁止行動を示すこと、とまとめることができ、そこで用いられているピクトグラムも当然、同じ役割を果たすために情報を伝達する記号であると捉えられる。よって、認知主体である私たちもまた、その役割を踏まえてピクトグラムを認知するわけであるし、ピクトグラムを認知する際には、その役割を踏まえた適切なドメインを設定することとなるのである。

ここで、案内表示の役割を踏まえたドメインの典型的な例として、「空間ドメイン」と「行為ドメイン」を挙げ、具体例を通じて考えてみたい。図 11 は、男性を表すピクトグラムとして、トイレなど、男女別で使用される施設を表すうで用いられるものである。また、図 12 は、訪日外国人観光客の増加に対応して近年定められたもので、特定宗教の礼拝施設を表している。

図 11.



[男子]

図 12.



[礼拝室]

(画像出所：「公益財団法人 交通エコロジー・モビリティ財団」ホームページ)

図 12 のピクトグラムが礼拝を表すのは、人物を模した図案の姿勢によるものである。フォザ他 (2006) によれば、線には「表現的な機能が備わって (同書 21)」おり、「類像的記号は、知覚可能なさまざまな局面——姿勢、動き、行動、感情など——の表現を引き受ける。(同)」とされているが、この例ではまさに、象徴化された図案が特定の行動を示している。つまり、認知主体はピクトグラムを行為ドメインにおいて認知することによって、座った姿勢で行う行為としての礼拝を解釈するのである。

一方、図 11 のピクトグラムを行為ドメインで認知した場合、そこから導かれるのは「起立／直立」という行為であるが、男性用の施設を案内するうで、そうした行為は意味を持たない。この場合には、描かれた図案を空間ドメインにおいて認知することにより、その類像性から男性という存在を認識することが適切である。

このように、ピクトグラムの表す情報内容を解釈するうでは、認知主体が適切なドメインにおいて記号を認知する必要がある。ドメインは、案内表示が有する役割を踏まえて推察することが可能であるが、さらに、コンテキストによって決定することが可能となる。つまり、実際にピクトグラムがどのような環境下で用いられているかという条件が、記号を認識するうで最適なドメインを認知主体に示唆するのである。次節では具体例を通じ、ピクトグラムの解釈におけるコンテキストとドメイン設定の関係性を確認する。

6. コンテキストとドメイン

本節では、ピクトグラムの情報内容の解釈に関して、コンテキストがドメイン設定に与える影響を考察する。まず、ガイドラインで定められている図案を確認したうで、それらが実際に用

いられている環境に即して分析することとしたい。

図 13 の図案は、前節で挙げた空間ドメインで認知することにより、自転車という乗り物を表すものと解釈されるが、行為ドメインで認知した場合には、自転車での通行を表すものと解釈することもできる。実際に図 14 では、禁止を表す図案と図 13 が組み合わせられ、自転車乗り入れ禁止を示すものとガイドラインで定められている。ただし、空間ドメインで認知する際には、乗り物としての自転車の禁止、つまりは駐輪禁止を示すものと解釈することもできる。

また図 15 は、空間ドメインでは、車椅子あるいは車椅子に乗った人物と認知され、行為ドメインでは、車椅子を用いた移動／活動と認知される。

図 13.



〔自転車〕

図 14.



〔自転車乗り入れ禁止〕

図 15.



〔障害のある人が使える設備〕

(画像出所：「公益財団法人 交通エコロジー・モビリティ財団」ホームページ)

このように本来、ピクトグラムはドメインに応じて多義的な解釈を許容する記号であるが、コンテキストに応じてドメインが決定されることにより、特定の解釈が導かれることとなる。

このことを確認するため、上述のピクトグラムが実際に用いられている例を通じ、コンテキストを踏まえたドメイン設定を考察することとする。以下の写真 1 から 3 はいずれも、新潟県立図書館前の通路に設置された案内表示に用いられているピクトグラムである（2018 年撮影）。

写真 1.



写真 2.



写真 3.



写真 1 は壁面に設置された案内表示であるが、この壁面とは、屋根付きの空間を構成するものであり、つまり、このピクトグラムは、壁面で区切られた限定空間を指示するものである。この場合、限定された空間の壁面に案内が掲示されているというコンテキストが、ドメイン設定に際して、空間ドメインの選択を優先させる。空間の限定性が、行為ドメインによる認知を許容しないためである。その結果、空間ドメインで認知されたピクトグラムは、乗り物としての自転車と解釈されることとなる。つまり、当該空間が、自転車の駐輪用に設けられた空間であることを表

すものと解釈されるのである。

一方、写真2と写真3のピクトグラムは、それぞれ固定式、可動式の案内板に表示され、図書館前の通路脇に設置されたものである。これらの例では写真1と反対に、通路という開放空間の脇に案内が表示されていることがコンテキストとして、行為ドメインでの認知を促す。すると自転車の図案は、単に事物としての自転車ではなく、自転車に乗車しての通行を表すものと解釈され、禁止を表す図案との組み合わせによって、当該通路への自転車乗り入れ禁止が認識されるのである。なお、写真3のピクトグラムでは、自転車に人物が乗車した図案が用いられているが、これにより、行為ドメインでの認知がより明示的に促されることがわかる。

次に掲げるのは、新潟県立図書館内で用いられているピクトグラム（写真4）と、図書館に隣接する新潟県立鳥屋野潟公園内に設置された看板の案内表示（写真5）である（2018年撮影）。

写真 4.



写真 5.



写真4は、図書館入り口脇のパーティションに掲示された案内表示であり、車椅子の形状を模したピクトグラムが用いられている。この場合にも、パーティションで仕切られた空間の限定性により、ピクトグラムは空間ドメインで認知され、車椅子という用具が解釈される。実際にこの案内表示の脇に車椅子が並べられているのを目にすれば、ピクトグラムはまさに対象を類像的に表したものであり、当該空間が車椅子の収納場所であることを表すものと確認できる。ただし、その車椅子が図書館内で利用可能なものであるという情報を、ピクトグラムのみから読み取ることは不可能である。この案内表示でも、図案の脇に言語情報が付されているからこそ、利用に関する情報を理解することが可能と考えられる。この例からは、利用可能性を視覚的に表す手法を課題として挙げることができる。

さらに写真5は、公園内という開放空間に設置された案内表示であり、そのコンテキストが行為ドメインによる認知を促す。その場合、車椅子に乗った人物の図案と、矢印記号の組み合わせからは車椅子による通行が解釈され、あたかも障害者用にバリアフリーの道順を示したものであるかのようにも感じられる。ただし、実際に現場で矢印がある方向に目を向ければ、そこにはトイレと思われる施設があることが視認され、また、そこに至る直線的な道筋が特段のバリアフリー化を施したものでないことも確認できる。この時点で認知プロセスは修正され、行為ドメインによる認知が棄却され、より適切なドメイン設定が模索されることとなる。なお、いずれにせよ、この例では、言語記号なしで正確な情報内容を理解することは困難と思われ、そもそも、「身障者お手洗」との表示さえあれば、車椅子のピクトグラムは不要であるとも言える。この例は、視

覚記号と言語記号という体系の異なる記号による冗長性が認められるものであり、そこから、特定施設の所在をピクトグラムによって示すうえでの課題が窺われる。

以上、ピクトグラムが実際に使用されている事例に基づき、コンテキストがドメイン設定の手がかりとして機能する例を確認した。今回挙げたのは、空間ドメインと行為ドメインの区別のみであるが、同一のピクトグラムであっても、その解釈はドメインによって変化する多義的なものであることが確認できた。さらに、ドメインが設定されることによってピクトグラムの多義性は限定されるが、そのドメイン設定には、案内表示が設置される環境がコンテキストとして関与していることも確認された。

ピクトグラムによる情報伝達を検討する際には、コンテキストとドメインを踏まえ、その認知プロセスを考察することが有用である。

7. まとめ（ピクトグラムの認知プロセス）

本論では、案内表示の用途で使用されるピクトグラムを分析対象とし、それが表す情報内容の解釈を、認知という動的なプロセスとして分析することを試みた。

これまで述べてきたように、ピクトグラムは一定の約定性に基づいて対象を指示する記号体系でありながら、コードを解さない受信者でも、類像性によって指示対象を解釈することができるように図案化された記号表現が用いられている。

類像性による対象の指示は、厳密な約定性を減少させ、多義的な解釈を許容することにつながる。換言すると、認知主体が記号を認知する際に、多様なドメイン設定が可能となることから、主体ごとに任意のドメインによる認知が許容されるということである。

しかしながら、案内表示は情報伝達のために用いられるものであり、その機能は限定されている。私たちは、案内表示を鑑賞対象として捉えてはおらず、誘導や規制など、一定の役割を果たすものと認識している。この認識が、ピクトグラムの認知に際して、ドメインの選択可能性を限定的なものとする。さらに、案内表示が掲示されている環境が、コンテキストとしてドメイン設定を特定のものに限定する。このプロセスによって、ピクトグラムは多義性を失い、誰にとっても常に一定の情報を伝達するものとして機能するのである。

もちろん、コンテキストが手がかりとして十分機能せず、適切なドメインが設定されない場合もあり得る。しかし、その場合でも、動的なプロセスの中で不適切な認知内容は修正され、他のドメイン設定が為されることとなる。認知というプロセスで捉えた際には、記号は予め定められた情報を一方的に伝達するものではなく、認知主体との相互作用を通じて、その解釈が確定されるべきものと考えられる。

本論では、ピクトグラムの認知に関して原理的なプロセスを提示することを目的としたため、限られたドメインについてのみ考察したが、さらに多様なドメインとコンテキストを前提に、より詳細な分析を継続することを今後の課題とする。

画像出所

「公益財団法人 交通エコロジー・モビリティ財団」ホームページ

http://www.ecomo.or.jp/barrierfree/pictogram/picto_top2017.html（最終閲覧日：2019年1月10日）

Crow, David (2010) *Visible Signs; An Introduction to Semiotics in the Visual Arts: second*

edition. AVA Publishing SA.

参考文献

- 公共交通機関旅客施設のサインシステムガイドブック編集委員会編 (2002) 『公共交通機関旅客施設のサインシステムガイドブック』交通エコロジー・モビリティ財団.
- 田中敦 (2017) 「視覚記号としての身振りの記号論的考察」, 『新潟国際情報大学 国際学部 紀要』第2号, 27-40.
- 田中敦 (2018) 「案内表示におけるピクトグラムの記号論的考察」, 『新潟国際情報大学 国際学部 紀要』第3号, 41-50.
- 難波功士 (2000) 『「広告」への社会学』世界思想社.
- 本田弘之・岩田一成・倉林秀男 (2017) 『街の公共サインを点検する——外国人にはどう見えるか』大修館書店.
- グッドマン, ネルソン (2017) 『芸術の言語』戸澤義夫・松永伸司 訳, 慶応義塾大学出版会.
(Nelson GOODMAN, *Languages of Art*, Hackett Publishing Co., Inc., 1976)
- フォザ, ジャン＝クロード、アンヌ＝マリ・ギャラ、フランソワーズ・パルフェ (2006) 『イメージ・リテラシー工場』犬伏雅一・前川陽郁・前田茂 訳, フィルムアート社.
(Jean-Claude Fozza, Anne-Marie Garat and Françoise Parfait, *Petite Fabrique de L'Image*, Magnard, 2003)
- Barthes, Roland (1964) "Rhétorique de l'image", *Communications*, No.4, 40-51.
- Crow, David (2010) *Visible Signs; An Introduction to Semiotics in the Visual Arts: second edition*. AVA Publishing SA.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar Vol.1 Theoretical Prerequisite*, Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1991) "Nouns and Verbs", *Concept, Image, and Symbol; the Cognitive Basis of Grammar*, Mouton de Gruyter, 59-100.
- Pateman, Trevor (1983) "How is understanding an advertisement possible?", Howard Davis ed., *Language, Image, Media*, Blackwell, 187-204.
- Wade, Nicholas J. and Swanston, Michael T. (2001) *Visual Perception: An Introduction, 2nd edition*, Psychology Press Ltd.

